

教育をこう考える(下)



伊藤 昇

五 変ぼうする社会と生活

先ほど、世界教育競争についてお話ししたのですが、日本でもその教育について混乱にぶつかっています。その原因をよく見なければ、今の子どもをよく理解できませんし、また、子どもを正しく見るためには、その外的条件としての社会的変動(changing society)といわれています(を)を見なければなりません。

そこで、社会的変動を見えますと、今日の子どもの母親の關係も、昔とはずい分違った關係になっていると思うのです。たとえば、私のような明治生まれの人間が、その死んだ母親を思い出す時には、いつも夜遅くまで、私のズボンやタビにつきを当てていた母親を思い出しますし、また遠足の前日には、上手でもないのり巻きを遅くまで作っていた母親を思い出します。とにかく、

私のために何かをしている母親を思い出すのですね。ところがどうでしょう。今の幼児が大きくなって思い出す母親というのはどういふものかというところ、――私、前に冗談でいったことがあります、それは、朝起きたら夜寝るまで、勉強勉強と子どもを追いかけているお母さん、間違った教育観を持った教育ママ、鬼のようなおつかない母親を思い出すことになるでしょう。今は、くつ下につきを当てている母親は、ほとんど見られません。今の子どもにも、つぎの当たったズボンはかせようと思っても、子どもはとてはきませんよ。また、明日遠足だ、じゃあおにぎり作ってやろうというところ、「いやだ、なんとかやのサンドイッチ買ってきてよ」なんていうし、私たちの母親でしたら、焼きたてのスルメをフーフーいってきいたんですけど、今の子どもは、「そんなのいやだよ、鳥の足一本焼いてくれ」なんてね。これは生活の変化

です。生活の変化ですから、私たちの母親の姿は、今の子どもたちには映らないのが当然です。生活の変ぼうの中から、母子関係というものも変わってくるわけです。

そういう点をよくつかまえると、皆さんが扱っておられる子どもの姿がはつきりするのではないかという気がするわけです。また、社会の変ぼうにも気をつけないと、子どもがよくわからないのではないかと思うのです。私たちの年代だと、今の子どもものすることがわからないことがたくさんできます。たとえば、もう名古屋場所は終わりましたが、すもうが始まると、幼稚園でもすもうをとる。じっと見ていると、一人が負ける。また立上がってすもうをとる、同じかっこうで同じ子が負ける。先生が「なにしているのよ」と聞くと「ただいまのは、ビデオテープでお送りしました」というのですからね。今の子どもやっていることは、よほど気をつけないとわからないですよ。また、こういうこともありました。家に、四つか五つの親戚の子がくるのですが、その子が、くじら尺のものを差しを持って座敷を飛びまわるので「あぶないからやめろ」というと「今、おじさんのうち、掃除してあげたのよ」という。私たちだと、掃除というものは、ほうきを持ってはくことだと思っ

ていますがね、今の子どもは、棒持ってブーというだけです。これは、東京のある学校の先生に聞いたのですが、その先生が小学校二年の息子さんに「上野動物園に連れて行ってやる」とい

うと、その子は、「オー、ナイス」というので、先生は、動物園へいく前に、西郷さんの銅像を見せてやるといふと、また、「オー、ナイス」と答える。そこで「西郷さんは、こんなに大きくて、着物を着ていて、犬を連れていってるぞ」といふと、子どもは「そんなことない」といふので、「いやそうだ」といふと、半ばけんかになりそうになったので、母親が中へ入って通訳してみると、子どもが考えている西郷さんは、西郷輝彦のことなんですね。(笑) 今の子どもにとっては、西郷隆盛は英雄でもなんでもないのです。西郷輝彦が英雄なんです。憧れの的なのです。マス・コミの中で育つ子どもというのは、私たちが育ってきた時の子ども像とまるで違うということです。先ほどの女の子ですが、父親が帰ってきたら、台所の母親の所へ飛んできて、「早くきてよ」といふので出ていくと、「早く抱き合って」なんていうんです。ほんとうに今の子は、三つ位になると、テレビやなにかの影響で、意味はわからないにしてもほとんどおとなの世界のことは知っているのです。クリスマスに、煙突からサンタがきて、おみやげ置いていくなんていっても、「そんなこと嘘だ、早くデパートに行って買ってこいよ」というわけです。つまり、社会の変ぼう、文化条件の変化、したがって、生活条件が変わってくれば、すっかり変わった子どもができてしまいます。そのところを、どうつかまえていくかということに、今日の教育上の大きな

一つの課題があるわけです。

そこで、いわゆる *changing society* というものを。生産構造

―マス・ブロー。産業構造―巨大化、二重構造―。社会構造―都市化、工業化（国内人口移動）。家庭構造―人間関係（核家族）

。文化構造―消費、マス・コミーの5つの観点から見てもすと、今日の生活の急激な変化は、ただ一つというならば、科学技術の進歩、発展によって、もたらされている。生活が、革命的に変化させられているということ。マス・コミも科学技術の進歩の結果です。科学技術が生活の根本の変化をもたらしているのですが、それは、生産の条件、生産構造が変わってきたということです。オートメーションの時代に入っているということです。石油や石炭の燃えかすから、こういう生地（自分の背広をさす）になってでてくるのですからね。これは化学繊維です。こういうものは、機械が作りだすのですから、たくさん使ってもらおうと思つて、レディーメードにしてしまうのです。そしてたくさん使ってもらうのです。マス・プロダクション（大量生産）するものを、マス・コンサンプション（大量消費）してもらうために、マス・コミ（大量通報）が必要になる。つまりPR時代です。

新聞広告、ラジオ・テレビのコマーシャルが、それを引き受けているわけです。マス・ブローマス・コミーマス・コンの時代がきているわけです。こういう時代に私たちは生きているのです

から、したがって、子どもはなんでも欲しがらばかりです。今の子どもが物を大切にしないというのも、そこからくるのです。昔は、子どもの欲しがるものと大人が欲しがるものは、完全に違っていたのです。それが、今の子どもはピアノだろうと、自動車だろうと、すぐ買えるものと思つています。ある子どもが「ピアノ買ってくれ」という。お母さんは、「そんなものうちは買えませんよ」というと、「だってテレビ見てごらんなきい。どこの家にもピアノがあるじゃないの」というんです。今の子どもは、そういう発想の仕方をするわけです。

そういうわけで、生産がオートメーションになって、マス・プロダクションになると、工場企業・産業の仕組が全部変わってきます。昨日まで、平和な農村地帯だったのが、今日は工場地帯になるということが、全国的に目まぐるしく展開している。そして関係産業だけが、そこに集まってくる。四日市コンビナート、京葉工業地帯、岡山の水島など、こういう所に全部企業が集まってきました。産業構造が変わって、大企業は大企業とくつついて、巨大化され組織化される。それにくつつけない企業は没落していくのです。産業の二重構造、つまり、大企業と、中小企業の格差が開くばかりです。それと同時に、社会構造の中で、都市化されてくるところは、生活水準が上がってきますが、それと反対に、旧態然としている農村は相対的にだんだん落ちてくるわけです。つま

り、農村と都市との二重構造がはっきりしてくるのですね。そういう変化の渦の中で子どもたちが育つわけですから、皆さんは、その地域の人の生活条件とか、その子の家庭条件とかをしっかりとつかまえることが教育者として必要だと思えます。

産業構造が変わって、工場地帯がたくさんできてきた結果、どういう現象が起こるかという、国内の人口移動です。農村からは若い働き手、果ては一家の主人まで出かせぎにいくので、農村では、子どもの養育、教育を全部母親がしよってしまうということが出てきています。農業経営も、女手一つでやるので、所によっては、農村の母親というのは、気違い一歩手前のような緊張をしているわけです。こうして、農村においては、農業の女性化、老人化という問題がでてきているのです。皆さんは、このような地域の子どもも扱わなければならないわけですね。

では農村を離れてやってきた連中はどうか、もう故郷へは帰りません。そして、東京の一室のアパートかなにかに住むわけです。家庭生活というのも、こんな所から、急激に変化しているのです。家庭生活の仕組が変わってきています。たとえば、男女平等とか、男性の女性化とか、いろいろいわれていますが、これは、憲法や民法が変わったというよりも、生活の条件からして男女平等がまさに実現しているのです。一つには住宅の条件です。たとえば、核家族といわれていますが、若い夫婦と小さな子

どもが、父や母と別れて、一室のアパートにくらしている。するとどういふことが起こるかという、ここに、ごきぶり亭主というのがでてくるのです。これは仕方ないですね。お嫁さんが、朝起きて、ふとんを上げる。その間亭主はいる所がないから、台所にいるのです。台所にいければ、たばこすうよりは、玉ねぎでも切ろうかということになる。玉ねぎ切っては、涙をだす。水をこぼす。水をこぼせば、台所をふくのですよね。つまり、台所をはい回るから、ごきぶり亭主っていうのでしょうか。(笑)

そういう中で、子どもが育っているのです。皆さんが育ってきた家庭環境と違うということですね。したがって、違った子どもができていくということです。ものの考え方が違うのです。皆さん大部分の方は、男女同権ないうと、新憲法によると考えますが、これからの子どもは、全然そんなことは考えない。初めから、同権になっているし、むしろ、同権以下の父親を見て育っているわけです。ですから、父のことを聞かないのは、当然です。母親の方が実力者なのですから。

たとえば、農村で母親の地位が上がったなと思うのです。それは、父親が賃仕事にでかけていく。または村のサラリーマンになって集める。次の日から、お小遣いを百円、二百円と渡してやる。だから、今まで、現金を持たなかった主婦が、現金を全部持

っているわけですから、子どもにしてみれば、母親はえらいと思うし、父親が、たまに、母親や子どもに千円貸してくれないうと、親父おちぶれやがったというわけです。

こういう人間関係の変化というものが、私たちの育ってきた時代というものと、違った子どもを産みだしているわけです。このような家庭生活の変化の中で、考えなければならぬことは、老人の問題ですが、これは今後の研究課題としましょう。

最後に、生産が変わり、産業、社会の構造が変わっていく中で、一番子どもにとって大切なのは、文化構造が変わってきたことと、消費構造が変わって、大量消費とマス・コミの時代になって、それによって、私たちの生活がかきみだされているということとです。いいかえますと、科学技術の進歩によって、物質的生活の面が大きく変化すると同時に、マスコミの徹底によって、私たちが及び子どもたちの、ものの考え方が変化している。つまり、精神的条件が変化しているのです。ですから、物心両面から、人間が変化を要求されている時代だと、こういうふうに見えるわけです。

では、以上のように、産業界が変わり、人間像というものが変わっていく中で、今日の変化する社会では、いったい、どういふ人間を要求しているのか、文部省の意味ではないのですが、そういった人間像を考えてみる必要があるように思います。

六 社会的要請

まず今日、社会が要求している social need と、社会が要請する人間について考えていきたいと思います。

先ほど、日本社会が競争社会であるところからいきすぎた教育競争が行なわれているとお話したのですが、こういうことが行なわれている原因というのは、日本が、学歴社会であるからです。

学歴社会・終身雇用・年功序列ですね。日本の社会は、今日なお学歴社会です。封建社会がくずれ、土農工商の身分差別は明治になって無くなりましたが、今度は、学校格差という、新しい階層社会ができました。大学卒、高校卒、中学卒とはっきり区別されるのが今日の社会です。その上、大学も、官尊民卑的な格差ができています。日本社会は学歴社会で、終身雇用制度ですから、有名大学を出て、大企業へ入ってしまえば、後は仕事さえしないうで(めだつた仕事をする)、足をひっぱられて、失敗するので(じつとしていけば、ちゃんと停年までいくのですから、教育ママが、必死になって、社会的条件の良い学校へやりたい、と思うのも、親心としては、私はわかるのです。

このような、学歴社会、年功序列、終身雇用の社会の中には、進歩というものがありません。安住があるだけです。ところが、幸か不幸か、日本の産業が、ここ二、三年来、とてつもない不況の

ために、これではやっていけなくなつたのです。日本の産業が、開放経済の中に巻き込まれ、大企業は各国を相手に貿易競争をしなければならなくなつた。そうしてみると、こういうのんきな雇用関係では、人件費ばかりかかつて、絶対に競争に勝てないことがわかつてきたわけです。つまり、人間を雇う場合に、どの大学をでたかよりは、なにができるかで雇わなければ、世界の経済競争に勝てないのです。社会は、なにができるから使つて下さいという人間を要求しているのです。これが社会的要請です。今日は、こうして、学歴社会が、実力社会、能力社会に切り変わるうとしてゐるのです。しかし、こういう産業の中で、勢い隆々たる会社があるわけです。そこでは戦後派は学歴ではなく、できる仕事はないかということ雇つてゐるのです。昨年からは、採用試験を通つた社員の履歴書を全部焼き捨ててしまつたのです。ですから、採用した人間が、高校卒だか、大学出だか全然わかりません。上の人が見ていて、あの人の働きぶりは管理職に向いてゐると思うと、そちらに入れるわけです。

そこで私が申し上げたいことは、ここで、どんな人間を作らなければならぬか、つまり期待される人間像というものを、日本全体で考えなければならぬところにきてゐるということです。

期待される人間像をつくるのに、一番必要なことは、もつて生まれた特色ある素質を、一番向いた所へのばすということです。

皆さんよく御承知のように、人間には、いろいろの形があります。知能型—技能型—思考型—行動型というようにです。王さんとか長島選手のような行動型の人は、もつともつとそつちの方へ、のばさなければならぬのです。それが、記憶力も暗記力も比較的弱いのに、無理に、家庭教師をつけ、塾へやつて、有名大学へ入れようとするから、その間に、ずい分苦しんで脱落する子どもができてくるのです。これからは、行動型であろうと応用型であろうとなんでもかんでも、原理的なものを暗記させて有名大学へ入れ、社会へ出すというのではなく、もつて生まれた素質というものを、良い環境で、そして、それを自分でのばすという子どもをつくらなきゃならない。つまり、人間や動物が成長する中で、素質が大切だということはいうまでもありませんし、その素質を、より適切な環境の中でのばすことも必要です。これは、血統書づきの素質の良い犬を、適当な環境で育てれば、良い犬になると同じです。ここまでは動物も、人間も同じなのですが、たつた一つ違ふことは、人間は、生まれながらにして、より良く成長しようとする意欲をもつてゐるわけです。昨日より今日、今日より明日、良くなるうという気持を子どもなりに持つてゐるわけですから、その意欲をのばしてやらなきゃならないと思うのです。その意欲をのばしてやるのが、教育だと私は思うのです。

勉強はおもしろいと、一つのことを知るといふことが、こんな

に楽しいことかと、自分で経験させるのが、教育だと思うのです。それがですね。たとえば幼児の場合にもあるかも知れませんが、小学校の子どもが「お母さん、百点もらってきたよ」というと、それを見たお母さんは「百点何人いたの」という。また、「お母さん九十点だよ」というと「となりの誰ちゃんは百点でしょ」なんていわれたら、子どもは、すっかり意欲をつぶしてしまいますね。こういった比較型、陳列型の親のもとでは、子どもはうまくのびません。

だから、生まれながらにして持っている素質というものに、自分からのびようとするすばらしい意欲を与えて、自らの人生を、自ら切り開くという所に、今日の教育を切りかえていかなければならないと思います。そうしないと、会社そのものが、能力主義になりつつありますので、皆さんの扱っておられる子どもさんたちの時代は、当然学歴社会ではなくなっていますから、社会的要請に合わなくなっています。

意欲素質をのばす教育にするには、六・三・三・四制の改革が必要なのです。その改革をして今度は実力社会の中で要請される人間、つまり獨創性、創造性のある人間これは天才的な人間ということではなく、すべて自分の頭で考えられる人間ということですよ。そういう人間を教育によって、造っていかねばならないと思うのです。それには、子どもたちに人のまねをするなどいうことを教

えて、獨創性、創造性を培ってやり、新しいことにおつかったら胸をおどらせる好奇心を持つような子どもにしてやることです。

「羽仁説子さんの「私の育てた三人の子」という本に書いてあったのですが、羽仁進さんが、小さい時に、アリを見つけて半日位追っかけていた。ありは、とうとう、石の下の小さな穴に入った。羽仁進さんはその石をどけようとしたとき、それまで、黙って見ていた説子さんが、ぱっと止めて、「そこは、ありさんのお家よ、石をどけて、お家をこわしたら、ありさんがかわいそうでしょ」といったそうです。私は、羽仁説子さんは、なるほど、すばらしい教育者だと思いました。ありを見ている子どもをそのままにしておく所に、好奇心というものをのばしているものがあると思うのです。つまり、好奇心というものから子どもの獨創性、創造性がでるのでね。

しかし、今日では創造性という中には、。理解性。批判性。協調性。統率性。積極性。粘着性が必要となるのです。このことは、現代が要求する人間像というものを、科学技術関係者がまとめたものの中でいっていることですが、科学技術時代にそなえていなければならぬ性格としてこういうものをあげているわけです。これはアメリカの教育改革においても同じことです。

この科学技術時代は、人間の前に不可能はないといわれるほど人間の独特の考え方を実生活に移せる時代です。こういった獨創

的なものを考えだす能力が創造力ですが、しかし今日の社会では、どんなに頭が良くても、一人でできるという仕事は、特殊な芸術作品以外にないのです。どんなすばらしいアイデアを持っていても、グループの中で話し合って、お互いに理解し合わなければ、今日は学問でさえ成り立たないのです。今の研究はグループ研究です。つまり、そこには、相手の立場を理解したり、批判しながらも、協調のできる人間をつくっていかなければ、学者にしようとして社会人にしようと、どうにもならないわけです。つまり、集団の中で、中間と手のつなげる人間、協調性のある人間をつくるということは、これからの社会においては、一番大切なことなのです。頭は良いが、いつも一人で教室のすみで孤立しているなんていうのはだめです。頭はたいして良くないが、あいつのまわりはなんだかほやほやしているという人間は一生幸福だと思います。そういう人が、民主社会の中で一番大切な、リーダーシップをとるのですね。獨創性をつくるということは、同時に社会集団の中で楽しく生きられる人間をつくることでもあるわけです。またそのためには、能力ばかりあっても、健康がなければなりません。積極的に仕事をする、研究をするというためには、健康が一番です。そして、一べん研究にかみついたら、はなさない粘着力、根性がある人間をつくっておかなければならないわけです。

ここに書きました現代が要請する人間というものは、皆さんが

幼児を扱っている中で、いつも考えておられると思うのです。今日も、この講習会で、創造性を培うということを皆さんは勉強されていくわけですが、幼児教育を担当される皆さんは、自分の頭ものを考える人間をつくってほしいと、私は思います。

七 日本教育の創造

最後に、日本教育の創造ということにふれたいと思います。

今まで申したような、日本人が現在持っている教育観というものを、根本的にかえなければならぬと、私は思っております。

これにはいろいろな理由がありますが、一つには、学校教育が一生において占める割合が、比較的小さくなったように思うからです。それは、一つには、人生が長くなったということです。

人生五十年といわれた時代には、二十五才で大学をでれば、あと二十五年しか働けませんでした。今日では、人生七十年ですので、大学をでてから五十年近く働くわけです。そうすると、学校でやった十余年という人生は、人生の一部でしかないことです。

しかも、現代は、information explosion いわゆる情報爆発時代ですから、子どもは覚えることがたくさんあるし、先ほど申しましたように、先生は、ドッキングについて説明してくれといわれても、説明できない時代です。

そこで、学校教育でやるものは、人間として、社会人として、

本当に持っていないなければならない基礎的なことだけになってくるわけです。なにもかも、学校教育に任せるといふ時代はとっくに過ぎてしまっています。学校教育では基礎をやって、後は、マス・コミにしろ、あるいは、社会的な教育機関にしろ、社会の中で、むしろ勉強する時代なのです。今は、社会人になってから勉強する時間がぐんとふえてきています。社会に生きていく道程において、教育は続けられるということですね。“Life is education”といわれたあの時代とはまた一つ意味の違った「生涯教育」ということを、私たちは考えていかなければならないと思います。ことに子どもの教育を考える時に、子どもを大学へ入れてしまえば、もう母親の任務は終わったという教育ママの考え方ではだめです。私たちは、家庭においても、社会においても、人間一生が教育なんだと考えて、小学校の時少し成績が悪くても、一年、二年ふらふらしても、社会にでて、ちゃんと勉強していくことのできる子をつくらなければいけません。また、日本の産業界が実力社会になった時、高校をでて働いていた子が勉強しなくなつて、そこで初めて大学へ入る。それでこそ大学の意味がでてくるのです。つまり、勉強というものが一生続くということに、私たちは、ここで頭を切りかえなければいけないのです。幼児教育も、この生涯教育の中で、どのように位置づけるかを考えていかなければならないわけです。それが今日の課題でもあるのです。

このような生涯教育を考えていかなければならない必要がでてきたのは、先ほどから申すところの社会変ぼうからですが、もうこのへんで、明治以来、先進国の教育制度をとり入れるのに忙しすぎて、ものまねばかりしてきた百年間の模倣文化から、一進も二進も、勇気を持って踏みだし、世界的視野の上に立って、あるいは日本的といわれても良いでしょうが、日本人の頭で、日本の教育全体を創造していかなければいけないと思います。

その中で、幼児教育をどこに位置づけるかということに関しては、皆さん方が、現場の経験と研究とを積み重ねることによってできたものを、日本の新しい幼児教育として位置づけていただきたい。学校制度、幼児教育内容といったようなものについて、お役所的な、上からいわれたことに服従しないで、皆さんの力で積み上げたものをもって、日本の新しい幼児教育として、位置づけていただきたいと私は思うのです。そして、そういう積み上げの中で、世界に比類のない日本の教育というものが創造されたならば、私は、これからは世界の諸国の人たちが日本へ学びにくるのではないかと思います。たいへん、大げさなことを申すようですが、明治百年、幼稚園九十年を迎えた今日、私は、外国の模倣文化からぬけだす一つの根本的な基礎的なものとして、教育のことを、皆さんとともに、今後とも考えていきたいと思っています。

(日本幼稚園協会主催幼児教育講習会講演より)